第一章　玉鬘の物語　玉鬘、鬚黒大将と結婚

［第一段　鬚黒、玉鬘を得る］

「*内裏に聞こし召さむこともかしこし（右大将が姫に通じて、姫の潔斎が果たせず出仕をご辞退申し上げることを、帝にお聞き頂く事も恐れ多い）。しばし人にあまねく漏らさじ（しばらくは世間に広く知らせないように）」と諌めきこえたまへど（と当の右大将にも源氏殿は注意申しなさったが）、さしもえつつみあへたまはず（大将はとてもそのように隠し通し為されません）。　*「内裏に～」は注に＜以下「漏らさじ」まで、源氏の鬚黒大将に注意する詞である。しかし、源氏の心ともとれるような表現。「漏らさ」「じ」（打消推量の助動詞）は、自分自身に向かって戒めているような表現である。『完訳』は「源氏自身の無念さもこもるか」と指摘する。十月に尚侍として出仕することが予定されていた（「藤袴」第一章七段）。その前に鬚黒大将が玉鬘に通じてしまったことをさす。＞とある。驚くべき展開だ。藤袴巻第三章第二段に「九月にもなりぬ」とあり、十月からの御所勤めが決まって失恋を嘆く手紙が諸侯から寄せられたものの、「かやうに何となけれど、御わびごとも多かり」と出仕の運び自体には変更が無く過ぎているかのような語り口で巻了となっていた。それが、当巻冒頭から事態が激変していて、その説明記事が無い上に、新事態を前提にした話が展開されているのでは、筋を追って読み進むことが出来ない。これで脱稿が無いとしたら、作者は編集能力に欠陥がある。それも、六条院夏の町の西の対に右大将が忍び込むなどという大変な見せ場であり、物語上の意味としても相当に重要な、肝心なその場面が割愛されているのは悪質だ。お陰で、どんな枕絵を書いても間違いには成らないのかもしれないが、物語に何が書いてあっても絵をどう描くかは元々自由だし、背景に何も書いてなければどんな演出も臨場感に欠ける。非常に不満だ。

ほど経れど（通い出してから数日が経ったが）、いささかうちとけたる御けしきもなく（少しも気を許す御様子も無く）、「思はずに憂き宿世なりけり（思っても居なかった厭な人生になってしまった）」と、思ひ入りたまへるさまの*たゆみなきを（思い詰めていらっしゃるような姫の他人行儀さを）、「*いみじうつらし（本当に情け無い）」と思へど（と大将は思ったが）、*おぼろけならぬ契りのほど（夢で終わらずに姫と情交を果たせたことを）、あはれにうれしく思ふ（身に沁みて嬉しく思います）。　*「たゆみなし」は「弛み無し」で＜緩みが無い、油断し無い、気が張っている→親しくしない、余所余所しくする、他人行儀にする＞。　*「いみじうつらし」は注に＜鬚黒大将はひどく辛いと思うが。＞とある。「思へど」「思ふ」と敬語がないのは、この文が大将の目線で語られているということのようだが、大将も貴人であり敬語表現の場合もあり、確かに此処の辺りの主語省略は分かり難い。主場面の割愛で語り手の呼吸が伝わらないから尚更だ。　*「おぼろけならぬ契り」は＜一通りではない前世の因縁→特別なご縁＞という言い方だろうが、「ほど」はそれの＜実感＞であり、それは姫と肌を重ねて得た感触に拠るものだ。その場面が無い以上、此処で明示しないと言い換え文が成立しない。

見るままにめでたく（見るほどに美しく）、思ふさまなる御容貌（理想通りの姫のお顔立ち）、ありさまを（お姿を）、「*よそのものに見果ててやみなましよ（他人の妻になってしまうのを見たかも知れなかった）」と思ふだに胸つぶれて（と思うだけでも胸が締め付けられて）、*石山の仏をも（石山寺の観音様に）、*弁の御許をも（大将の夜這いを手引きした弁の御許を）、並べて*預かまほしう思へど（準えて信心したいくらいに大将は思ったが）、女君の（大将の女になった姫君が）、深くものしと疎みにければ（その女房を深く憎んで遠ざけたので）、*え交じらはで籠もりゐにけり

(弁の御許はとても御仕え適わず自宅で謹慎していました)。　*「よそのもの」というが、最も可能性があったのは帝だ。いざとなれば恋敵は帝でも遠慮しない、という時の高官の帝への親しさは、実際に近くに居てこそ建前として敬うという本音が窺えて楽しい。　*「いしやまのほとけ」は注に＜滋賀県大津市にある石山寺。本尊は如意輪観音像。当時霊験あらたかな観音として女性の信仰を多くあつめた。ここは男性の鬚黒大将が熱心に祈願した。＞とある。関屋巻で源氏殿も参詣。　*「べんのおもと」は注に＜玉鬘付きの女房で、「藤袴」巻に登場。鬚黒と玉鬘の結婚に一役果たしたらしい。＞とある。さて、この「～をも、～をも」だが、今だと＜～とも、～とも＞という言い方と同じで、単に並列に列挙しているのではなく＜混同するほど同等に(思う)＞気持ちを表す語法で、実際には一方の価値は広く社会的に認められていて、もう一方の私的な功績をそれに「並べて(準えて)」讃える言い回しだ。　*「あづく」は＜委託する＞で＜神仏の霊験に託す→神頼みする＞という意味だろうが、此処では「預く＋まほし(望む)」だから＜信心したい、拝みたい＞。実は此処の文は、原文に近い言い方の＜石山の仏とも弁の御許とも並べて拝みたい＞で十分現代語への言い換えに成ると思うし、その方が当時から今に変わらぬこの文型を実感できるとも思う。が、それでも「籠もりゐにけり(謹慎していた)」の主語である「弁の御許」を、此処で＜を＞の格助詞で対象体として浮かび上がらせないと、文全体の力点が現代語構文らしくない気がする。　*「え交じらはで籠もりゐにけり」は注に＜弁は他の女房に混じって出仕することもできず、里に謹慎しているのであった。＞とある。弁の御許は姫に恨まれることを考えなかったのだろうか。姫の近くに居たら、姫の心情はおおよそ分かる筈だ。全くの当て図法だが、気に成るのでこの人の事情を少し考えてみたい。この人は、泊り掛けで勤める事があっても、本来は通いなのだろう。大内裏の外は里というらしいから、里に下がっていたとも言えるのだろうが、六条院を追い出されたのではなく、「籠もり居」は自宅謹慎の語感。また、恐らくは藤原右家筋の弁官の縁者で、だから右大将は、この者を取り次ぎに頼んだに違いない。しかし女は姫に仕えている以上、いくら派閥の領袖の頼みでも、便宜は図るが無理は聞けない。が、実父の内大臣も大将を認めている。藤中将も口添えする。また、源中将も少なくも悪くは言わなかったかも知れない。つまり、姫を売っても自分の一族が路頭に迷うことはなさそうだ。それに何より、姫が本当に慕っているのは実父の内大臣であり、その内大臣の意向に沿うのは、姫にとっても悪いことでは無いだろう。それに何しろ、大将自身も将来ある実力者で、とても悪い縁談とは思えない。それに‥、利を図って手放すのが＜売る＞ということなら、最初に姫を売ったのは源氏殿だ。みたいなことだろうか。

げに(実際の所)、*そこら心苦しげなることどもを(多くの手馴れた風流な懸想文の数々を)、とりどりに見しかど(いろいろと目にしたわけですが)、*心浅き人のためにぞ(恋愛経験が足りない人のためにとあって)、寺の験も現はれける(寺のご加護も現れたのです)。　*「そこら」は＜幾許、数多くの＞。「心苦しげ」は＜姫が居心地悪くしていらっしゃるように見える＞という語感で、具体的には藤中将に事情を打ち明けられなかったり、諸侯から趣向を凝らしたお手紙を頂戴したこと、かと思うが、それらを傍目で見た女房の語り口なので＜風流＞くらいか。　*「こころ」は＜気持ち、考え＞でもあるが、此処での「心浅き」は「心苦しげなる」の対語だから＜情緒、趣向、工夫、教養、学識＞のことだ。それが「浅し」というのは＜工夫が無い手紙→実直一点張り＞ということで、ズバリ恋愛の＜心得が足り無い→経験不足＞とした方が「ために」に繋がり易い。「ためにぞ」の「にぞ」は「ため」を強調して説明する＜だからこそ＞。

大臣も(源氏殿も)、「心ゆかず口惜し(予定が狂って残念だ)」と思せど(と御思いに成るが)、いふかひなきことにて(大将と姫の契りは否定しても無くならない事実だし)、「誰れも誰れもかく許しそめたまへることなれば(内大臣と春宮の母君という藤原両家が大将を姫の婿に認めなさっていることなので)、引き返し許さぬけしきを見せむも(今さら私が反対の態度を見せるのも)、*人のためいとほしう(大将の身分が高い為に世情不安が懸念されて)、あいなし(不都合だ)」と

思して(と御思いになって)、儀式いと二なくもてかしづきたまふ(二人の婚儀をそれはまたとなく豪勢に執り行いお世話申しなさいます)。　*「ひと」はこの場合、話題の人、即ち大将本人だろうが、「人の為」は＜大将の利に資するように＞という意味とは思えない。源氏殿は大将を、人柄はともかくも、紫の上の姉の夫という間柄から、養女の婿には都合が悪いと考えていて、この事態を「心ゆかず口惜し」と思っているのだから、殿には大将の立場を思い遣る心算も必要も無い。つまり、この「ため」は＜利益目的＞ではなく＜理由説明＞だ。だから「ひと」は＜大将の地位身分の高さ＞であり、「誰れも誰れもかく許しそめたまへる」という藤原両家の合意という力関係をも意味する。こうなっては、さすがの太政大臣源氏殿も、これに反対するのは「いとほし(懸念に思う)」と政情不安、というかハッキリ言えば自分の失脚、を危惧「う(せざるを得ない)」という自らの政治力の限界を思い知らされる、という注目すべき記事だ。反対などして敵に回るよりも、むしろ進んで婚儀を執り行い、藤原両勢力に自分の利用価値を印象付けるほうが得策だ。というより、既に恩を売れる立場ですら無く、追い詰められた立場を如何に体裁よく整えるか、という問題なのだろう。源氏殿は自分が抱える確執から、内大臣ばかりを意識しすぎた。また、気心の知れた弟宮を誘い込んで余裕を持って優雅な恋遊びも楽しんだ。が、その内にも殿が御し得ない様々な思惑や動きが絡んで事態は進む。大将の一途な思いは、恐らく源氏殿の計算外だったのだろう。そして、それが藤原両家の思惑と合致するなど、さらに計算外だっただろう。周到な劇構成だ。いや、実相か。

いつしかと(一日も早くと)、わが殿に渡いたてまつらむことを思ひいそぎたまへど(大将は姫を自邸に招き入れ申すことを準備なさるが)、軽々しくふとうちとけ渡りたまはむに(軽々しく直ぐに不用意なまま引越なさると)、かしこに待ち取りて(あちらで待ち受けて)、よくも思ふまじき人のものしたまふなるが(姫の輿入れを心良くは思わないだろう人がいらっしゃるのが)、いとほしさにことづけたまひて(懸念されることを託なさって)、

「なほ(やはり)、心のどかに(ゆっくりと)、なだらかなるさまにて(波風を立てないようにして)、音なく(騒ぎにならず)、いづ方にも(どの関係者にも)、人のそしり恨みなかるべくをもてなしたまへ(姫が非難されて恨まれる事が無いようにお取り計り下さい)」

とぞ聞こえたまふ(とのように源氏殿は大将に注意申しなさいます)。

[第二段　内大臣、源氏に感謝]

父大臣は(実父の内大臣は姫君に)、

「なかなかめやすかめり(大将との結婚は、どちらかと言えば無難でしょう)。ことにこまかなる後見なき人の(特に親身な後ろ盾の無い人が)、なまほの好いたる宮仕へに出で立ちて(事務職とは言え帝のお側で宮びを競わざるを得ない御所勤めを始めて)、苦しげにやあらむとぞ(辛い目に遭うのではないかと)、うしろめたかりし(心配していました)。心ざしはありながら(私はあなたをお世話したいという気持ちはありますが)、女御かくてものしたまふをおきて(正妻腹の娘が既に女御として帝にお仕えしているのを差し置いて)、いかがもてなさまし(どうしてあなたを引き立てることが出来ましょうや)」

など、忍びてのたまひけり(ひそかにお手紙を送っていらっしゃいました)。

げに(確かに)、帝と聞こゆとも(帝とは申せ)、人に思し落とし(姫を正妻より格下の者とお思い為さり)、はかなきほどに見えたてまつりたまひて(ただ愛玩して楽しむ相手としてお考えなさって)、ものものしくももてなしたまはずは(正式な地位にお就けなさらないとすれば)、あはつけきやうにもあべかりけり(尚侍就任は果敢無いもののようにもなり兼ねません)。

*三日の夜の御消息ども(婚礼三日目の祝い餅の席でのことを内大臣は数人から)、*聞こえ交はしたまひけるけしきを伝へ聞きたまひてなむ(源氏殿と大将が和やかに歌を詠み交わしなさった様子として伝え聞きなさったので)、この大臣の君の御心を(今回のことでの源氏殿の御判断を)、「*あはれにかたじけなく(実に勿体無く)、ありがたし(御目出度い)」とは思ひきこえたまひける(とのように思いそう殿に申し上げなさいます)。　*「みかのよ」とは「三日の夜の餅(みかのよのもちひ)」のことらしく、「みかのもちひ」は＜平安時代、婚礼後3日目の夜に、妻の家で新郎・新婦に食べさせた祝い餅(もち)。また、その儀式。三日夜(みかよ)のもち。＞と大辞泉にある。「消息(せうそこ)」は渋谷訳文では＜手紙＞としてあるが、これは「伝へ聞きたまいて」と内大臣が耳にした幾つかの＜情報＞かと思う。　*「聞こえ交はす」は、その祝儀の場で実際に相手に聞こえるように互いに歌を詠み交わす、ということで、それ自体が和やかな場を意味する、と思う。大意は与謝野訳文に従いたい。　*「あはれに～」は＜内大臣の源氏に対する感謝の気持ち。＞と注にある。そういう言い方をしているとは思う。が、力関係からして今の事態は源氏に少しく不利だ。この婚儀に象徴されるような藤原両家の結託が強まれば、源家は位だけ高い名目だけの名家で実質給付の大幅な減額という立場に追い遣られかねない。尤も、内大臣にしても源氏カードは手放さずに、右家に対する左家の優勢は保持しようとするだろうから、実際には源氏の失脚は望まないだろう。しかし、その気に成れば潰せるという今回のような実例を伴う脅しは、源氏殿の思い上がりを窘めるに十分な圧力ではある。だから、この台詞は「あはれにかたじけなく(我々藤原両家の意向に逆らわず進んで協力する姿勢を示しなさったのは、実に賢明で)、ありがたし(良い判断でした)」という響きを源氏殿には与えたに違いない。結局、権力の基本構造は変わらない。源氏殿は優秀だが妾腹の子に生まれ付いた。臣籍降下したので王家筋からの信任は絶大で、人気が高く、以って人心の掌握にも優れて、それが強い政治力ともなり、こうして話題に事欠かない。が、それも所詮は実力組織である藤原左家との信頼関係があってこそのもの、というワケだ。是は作者の道長へのお追従、というより、実相なのだろう。「とは思ひ聞こえ給ひける」の「とは」にはそういう皮肉が込められている、と読んで置きたい。

かう忍びたまふ御仲らひのことなれど(このように殿が世間には隠しなさった大将と姫君との御結婚のことだったが)、おのづから(次第に)、人のをかしきことに語り伝へつつ(人の口に面白い話として語り継がれて)、次々に聞き洩らしつつ(どんどん噂が広まって)、ありがたき世語りにぞささめきける(珍しい話題だと評判になりました)。内裏にも聞こし召してけり(そして帝に於かれてもこの話をお聞きあそばしたのです)。

「口惜しう(残念ながら)、宿世異なりける人なれど(私と結ばれる運命ではない人だが)、さ思しし本意もあるを(一度は決心なさったことでもあり、)。宮仕へなど(宮仕えを)、*かけかけしき筋ならばこそは(妃候補の道筋としては)、思ひ絶えたまはめ(断念なさったのだろう、が、秘書として出仕する分には差し支えないだろう)」　*「かけかけし」は＜いかにも気にしている＞ような語感だろうか。大辞林には＜いつも心にかけている。執着している。好色めいている。＞とあり、此処では＜好色めいている→妃候補の＞だろう。注には此処の文型について＜「こそ--め」の係結び。文末であるが、文意は逆接的または反語的表現である。断念なさるのもよいだろうが、入内するのではないから、何構うまい、という意である。下に「内侍所にも」（第三段）とあるように、帝のこのことばによって、玉鬘の尚侍としての出仕が決定したこと

を暗示している。＞とある。「かけかけしき筋ならばこそは」の「ならば」は条件を示す接続助詞、「こそは」は特にその条件に限定して述語を得る係助詞。「思ひ絶えたまはめ」の「め」は推量の助動詞「む」の已然形なので、全体の文意は＜その条件以外の場合は問題ないだろう＞となる、かと思う。つまり、「思ひ絶えたまはめ」は「さ思しし本意もあるを」を受けているので、途中の句点文節は有り得ない。

などのたまはせけり（などと帝は仰せられたのでした）。

［第三段　玉鬘、宮仕えと結婚の新生活］

霜月になりぬ（十一月になりました）。神事（かみわざ、帝の祭祀行事）などしげく（などが多く）、内侍所にもこと多かるころにて（その進行補佐を司る内侍所も忙しい時なので）、女官ども（準備係の女官たちや）、内侍ども*参りつつ（お側仕えをする内侍たちが尚侍たる対の姫が住まう六条院夏の町西の対に報告および決裁伺いの為に参上しては）、今めかしう人騒がしきに（今を盛りと賑わう中に）、大将殿（婿として通っている大将殿が）、昼もいと隠ろへたるさまにもてなして（昼間から後ろの部屋に隠れるようにして）、籠もりおはするを（休んでいらっしゃるのを）、いと心づきなく（とても不愉快に）、尚侍の君は思したり（尚侍君はお思いでした）。　*「参りつつ」は注に＜女官や内侍司の人々が六条院に尚侍の玉鬘の決裁を仰ぎに参上する。接尾語「つつ」は同じ行動が繰り返しなされる意。＞とある。祀り事の方針は帝が重臣に諮ったとしても自ら決める。その実務は祭壇造りも式進行もそれぞれの係りが心得ている。尚侍への決裁伺いは形式だが、儀式だからこそ形式は重要で、そのために多くの者が権威者の許に馳せ参じる。そして、そのことこそが誰が国を動かしているのかを示す政治そのものであり、つまり祭事だ。などとも思うし、そうか、対の姫が尚侍になると、太政大臣の六条院だからでもあるだろうが、後宮に部屋を構える前には、こうして自邸にまで女官たちが挨拶に来るのか、と驚かされる記事だ。

宮などは（兵部卿宮などは）、まいていみじう口惜しと思す（姫が大将の手に落ちたことを誰よりも残念にお思いです）。兵衛督は（左兵衛督は）、*妹の北の方の御ことをさへ（姉の大将夫人の御立場まで）、人笑へに思ひ嘆きて（外聞が悪いと嘆いて）、とり重ね*もの思ほしけれど（重ね重ね決まりが悪かったが）、「*をこがましう（一人相撲で気負って）、恨み寄りても（大将を憎み込んでみても）、今はかひなし（今さらどうなるものでもない）」と*思ひ返す（と気持ちを切り替えます）。　*「いもうと」は＜古く、男からみて、その姉妹を呼ぶ語。妹、または姉。＞と大辞泉にある。古語辞典には、女性同士では＜姉を「このかみ」、妹を「おとうと」と呼んだ。＞ともある。大将の北の方は33歳の大将の四歳上らしいので、37歳くらいのはずで、それより年上だと源氏殿より上になってしまい、有り得なくは無いが、兵衛督も大将や兵部卿宮と同年代の33,4歳くらいを想定するのが穏当なので、北の方は兵衛督の姉と位置付けたい。因みに、「いもうと」は同腹の姉妹かと思われ、妾腹妹の紫の上は29歳だ。　*「もの思ふ」は＜気にする＞。「人笑へ（ひとわらへ）」は＜外聞の悪さ、体裁の悪さ＞だから、それを「気にしがち」なのは＜決まりが悪い＞。　*「をこがまし」は＜出過ぎる、僭越な＞という語感で＜独りで力む＞印象。　*「思ひ返す」は＜考え直す＞だろうが、「今は甲斐なし」と見切りをつけて、引きずらない。切り替えが早い。

大将は名に立てるまめ人の（大将は有名な堅物で）、年ごろいささか乱れたるふるまひなくて過ぐしたまへる名残なく*心ゆきて（長年少しも浮気沙汰も無く過ごしてこられたという片鱗も無く遊び好きになって）、あらざりしさまに好ましう（以前には考えられない風流人振りで）、宵暁のうち忍びたまへる出で入りも（夕方過ぎに現れて明け方にお帰りに成るお忍びでの六条院への

出入りも)、艶にしなしたまへるを(気取っていらっしゃるのを)、をかしと人びと見たてまつる(笑えるほどの変わりようと女房たちはお見受け申し上げます)。 *「こころゆく」は＜気持ちが楽しい方に向かう→遊び好きに成る＞。

女は(大将の妻となった姫は)、*わららかににぎははしくもてなしたまふ本性も(朗らかに華やいで振舞いなさる藤原姫本来の御性分も)、もて隠して(出さないようにして)、いといたう思ひ結ぼほれ(考えるほど気が塞いで)、心もてあらぬさまはしるきことなれど(姫が望んだ結婚でないことは誰の目にも明らかだったが)、「大臣の思すらむこと(源氏殿がお思いであろう藤原両家の圧力への敗北感や)、宮の御心ざまの(兵部卿宮の好意の)、心深う(教養高く)、情け情けしうおはせし(真心込もっていらしたこと)」などを思ひ出でたまふに(などを思い出しなさると)、「恥づかしう(申し訳なく)、口惜しう(悔しい)」のみ思ほすに(とばかり御思いになられて)、もの心づきなき御けしき絶えず(気分の沈んだ御様子のままです)。 *「わららか」は「わらは」に通じるのだろうか、子供のように＜無邪気な屈託の無さ→大様な朗らかさ＞という語感。

[第四段　源氏、玉鬘と和歌を詠み交す]

殿もいとほしう(殿自身も懸念し)人びとも思ひ疑ひける筋を(女房たちも疑っていた殿が姫を妻にしているという話の筋を)、心きよく*あらはしたまひて(大将との婚儀を祝ったことで、潔白だったと主張なさって)、「わが心ながら(自分を褒めるようだが)、うちつけにねぢけたることは好まずかし(私は場当たりで情欲任せな振る舞いは好まない性分なので)」と、*昔よりのことも思し出でて(昔から一夜限りの知らない女との情交はしてこなかったことも思い出しなさって)、紫の上にも、「思し疑ひたりしよ(疑っていらっしゃいましたよね)」など聞こえたまふ(などと申しなさいます)。 *「あらはす」は＜口外する、発言する、主張する＞で、「心清し」を証明したわけでも出来たわけでも無い。というより、殿と姫が明け方までいちゃついていたことは明示されているのだから、接吻・愛撫・手淫・口淫などがあったことは間違い無い。ただ、妊娠を避けて、膣内射精には至らなかったのかも知れない。あとは情交の定義次第で「心清し」の是非が照合されるが、「契り」には確かに＜血の交じり合い＞という語感はある。 *「昔よりのこと」は若い時に、催事で集まった若侍目当てに押し掛けた商売女とそれぞれが一夜を共にした時に光君は与しなかった、という記事があった。光君は召人を呼べたのだから、そういう性処理が必要無かったに過ぎないが、外形的な言い訳は成立するのかも知れない。

「今さらに人の心癖もこそ(こう言った以上は、今さら気まぐれなだらしない真似は出来ない)」と思しながら(と御思いになりながら)、ものの苦しう思されし時(姫が恋しくて堪らなく御思いになった時には)、「さてもや(いっそ契ってしまおうか)」と、思し寄りたまひしことなれば(お考えになったことも有るので)、なほ思しも絶えず(殿は未だ諦めきれません)。

大将のおはせぬ昼つ方渡りたまへり(大将のいらっしゃらない昼時分に殿は姫の部屋にお出掛けなさいます)。女君(大将夫人の姫は)、あやしう悩ましげにのみもてないたまひて(ただならずお加減が悪そうにしていらっしゃって)、すくよかなる折もなくしをれたまへるを(少しも元気な顔をお見せにならず力を落としていらっしゃったが)、かくて渡りたまへれば(殿がお見えになると)、すこし起き上がりたまひて(少し起き上がりなさって)、御几帳にはた隠れておはす(御几帳に隠れて改まって座っていらっしゃいます)。

殿も*用意ことに(殿も気構えが以前とは違って)、すこし*けけしきさまにもてないたまひて(少し余所余所しく振舞いなさって)、おほかたのことどもなど聞こえたまふ(季節柄のことや世間の流行事の話などのご挨拶を申し上げなさいます)。　*「よういは<事前の気構え>。この「ことに」は「殊に」の<特に>ではなく、「異に」の<常と違って>かと思う。　*「けけし」は<そっけない、よそよそしい、親しみにくい>と古語辞典にある。

すくよかなる世の常の人にならひては(実直で平凡な大将に慣れ親しんでみると)、まして言ふ方なき御けはひありさまを見知りたまふにも(以前に増して比べようも無く優雅な殿のお姿を姫は思い知りなさって)、思ひのほかなる身の(意外な縁に収まった自分の、有力者ではあるが優れた文化人では無い大将の妻となった、ありふれた貴族としての運命が)、置きどころなく恥づかしきにも(飛び抜けて高貴な源氏殿に六条院でお世話を受けた縁者としては、不十分な立場に思えて気も引けて)、涙ぞこぼれける(悔し涙がこぼれます)。

やうやう(次第に)、こまやかなる御物語になりて(込み入った事情のお話になって)、近き御脇息に寄りかかりて(殿は側の肘掛に寄りかかって)、すこしのぞきつつ(御几帳の隙間から姫を覗き見ながら)、聞こえたまふ(話し掛けなさいます)。いとをかしげに面痩せたまへるさまの(とても風情豊かに面やつれしていらっしゃる姫を)、見まほしう(もっとはっきり見たくて)、らうたいことの添ひたまへるにつけても(愛おしさも増していらっしゃると思うにつけても)、「よそに見放つも(他人に手放すというのも)、あまりなる心のすさびぞかし(余りに早計な思い付きだ)」と*口惜し(と殿も悔しく、)。　*「口惜し」は注に<語り手が源氏の心中を忖度した表現。>とある。だとしたら「く思ひ給ふや」のような語が省略されている。確かに、源氏殿の記述で敬語表現がないのは珍しい気がするが、此処は歌に繋がる内心文の書き方で<読点>で下に続く文と読むべきかも知れない。それに恐らくは、「よそに見放つも、あまりなる心のすさびぞかし」が先人の歌ないし何かの先例を下敷きにした言い方で、次の歌の枕になっているのだろうと、これまでの作者の書き方からして類推される。

「おりたちて汲みは見ねども渡り川、人の瀬とはた契らざりしを　(和歌 31-01)

「挿し込んだ事は無かったが、しないと言った事もない　(意訳 31-01)

*注に<源氏から玉鬘への贈歌。「汲み」「瀬」は「川」の縁語。「せ」は「瀬」と「背」との掛詞。女は初めて逢った男に背負われて三途の川を渡る、という俗信をふまえる。>とある。「初めて逢った男」とは、女が初めて男を意識した相手、のことだろうか。だとしても、男を意識する、ということも具体的には何を指しているの分からない。論理的に見せ掛けた情緒的な言い方だが、情緒的なだけに情緒に訴える説得力はある。「渡り川」は「さんづのかは」を言う言い方であると共に<川渡りすること>を言う言い方でもあるので、情景詠みの風情を持たせた言い回しになっているようだ。ただ、それも「降り立ちて汲みは見ねども」が<川辺に降りて水を汲んでみたわけではないが>という言い回しの洒落言葉に成っているだけで、歌全体が情景詠みの体を整えているわけではない。「おりたちてくむ」は「下り立ちて組む(一線を越えて縁組する)」という言い方だから、それを「見ねども」というのは<互いに男と女を意識したが最後の一線は越えなかった>ということで、やはり<中出しだけはしなかった>に聞こえる。で、「三途の川」だが<仏語。死後 7 日目に渡るという、冥途にある川。三つの瀬があり、生前の業(ごう)によって、善人は橋を、軽い罪人は浅瀬を、重い罪人は流れの速い深みを渡るという。三つ瀬川。渡り川。葬頭河(そうずか)。>と大辞泉にある。で、永久の誓いはしなかった、という言い方か。「人の瀬とはた契らざりしを」は渋谷訳文に<他の

男に背負われて渡るようにはお約束しなかったはずなのに＞と非常に分かり易く見事に言い換えられている。それにしても当歌は、俗に言う‘男らしくない歌’で、珍しい負け犬っぷりだ。

思ひのほかなりや(意外な結果でした)」

とて、鼻うちかみたまふけはひ(涙鼻をかみ為さっているようなのが)、なつかしうあはれなり(しんみりと身に沁みます)。

女は顔を隠して(大将夫人の姫は本音を洩らす恥ずかしさに顔を隠して、こう返歌為さいます)、

「みつせ川渡らぬさきにいかでなほ、涙の澪の泡と消えなむ」(和歌 31-02)

「無理が適わぬ定めなら、夢で終わると信じたい」(意訳 31-02)

*注に＜玉鬘から源氏への返歌。「渡り川」を「みつせ川」と言い換えて返す。人は死んだら、三途の川を渡らねばならないものであるのに、その前に死んでしまいたいとは理屈にあわない歌であるが、その理不尽な気持ちを詠んでこたえた。＞とある。「いかでなほ」が＜それでも何とか＞という無理を承知の抑えられない思い、を表しているのだろう。現実逃避。近松門左衛門なら心中物の花魁の辞世の句にでも仕立て上げそうな趣だ。夕顔の遊女っぽさにも通じる色気を感じる。

「心幼なの御消えどころや(夢にしたいとは、子供っぽい解消法ですね)。さても(現実は受け止めなければならないのですが、それにしても)、*かの瀬は避き道なかなるを(三途の川は避けられる道ではないようなので)、御手の先ばかりは(渡る時には、お手の先だけは)、引き助けきこえてむや(引き助け申し上げますよ)」と、ほほ笑みたまひて(殿は微笑みなさって)、　*「かの瀬」は＜三途の川＞。「避き道(よきみち)」は＜脇道、側道、間道＞とも辞書にあるが、ここでは「避けられる道、避けて通れる道」。「なかなる」は「なかるなる、ならずなる(～ではなさそう)」の音便だろうか。

「まめやかには(しかしあなたなら、本当の所は)、思し知ることもあらむかし(良く分かっている筈です)。世になき痴れ痴れしさも(私が色男ぶって寸止めするなどと言う、稀に見る根性無しの腰抜けで)、またうしろやすさも(それは同時に温厚さも)、この世にたぐひなきほどを(他に類を見ないほどだと。)、*さりともとなむ(だからこうなってしまったのも仕方が無い、と思ってくれていると)、*頼もしき(願うばかりです)」　*「さりとも」は＜そうはいっても＞という定型副詞ではなく、「さり(さあり、以上のことがある)」という動詞に、「とも(としても)」という逆接助詞がついた原型のままの意味だろう。そして、「となむ」の「と」は「とも」の条件を受け入れることを示す格助詞だから＜了承するというように＞の意味になり、下に＜思ひ給ふべく＞のような語が省略されている、と思う。　*「頼もし」は＜頼りに思う＞で、此処では＜期待する、願う＞だろう。

と聞こえたまふを(とお話しなさるのを)、いとわりなう(姫は最後の頼みの殿に因果を含められた気がして、とても居た堪れず)、聞き苦しと思いたれば(聞くのも辛いとお思いなので)、いとほしうて(殿は姫を気遣って)、のたまひ紛らはしつつ(話題を逸らしなさって)、

「内裏にのたまはすること*なむいとほしきを(帝に仰せられることには其方の出仕を差し支えないと気に掛けていて下さるので)、なほ(今からでもなお)、*あからさまに参らせたてまつらむ(少しの間でも其方を御所勤めさせ帝にお応え申し上げたい)。　*「なむ」は＜上の事柄を強く示す意を表す。＞と大辞泉にある係助詞なのだろう。また、「なむ」は＜解説的な言い方が多い＞ように古語辞典にある。が、「内裏にのたまはすること」＜なるものが＞源氏殿にとって「いとほしき」だとは読めない。帝は絶対であり、臣下がその仰せ言をどう思うかなど僭越至極不届千万だ。せいぜい「畏くも」を付けるくらいが関の山だ。是は、「内裏にのたまはすること」＜なるものは＞「いとほしき」という内容「を(だったので)」という構文で、帝が「いとほし」と仰せになった、という意味だろう。その「いとほし」の内容こそが、注にある＜帝の「口惜しう宿世異なりける人なれど思しし本意もあるを。宮仕へなど、かけかけしき筋ならばこそは、思ひ絶えたまはめ」（第一章二段）という言葉をさす。＞という記事で、つまり「いとほし」は＜帝が姫の出仕を差し支えないと気に掛けていて下さる＞という意味だ。　*「あからさま」は「あかる(赤る、明かる)」状態を言う「明から様(露骨な仕方、明白な様子)」ではなく、「あかる(離る、別る)」状態を言う「離ら様(別れの挨拶がてらの一寸した事)」のこと、らしい。

*おのがものと領じ果ててはは(大将が其方を自分のものと自邸に閉じ込めてしまっては)、さやうの*御交じらひもかたげなめる*世なめり(そうした御所勤めも難しくなる運びでしょうから)。*「おのがもの」は注に＜公人である尚侍を私物化してしまう。＞とある。つまり、此処の主語は＜大将＞だ。　*「御交じらひ」は＜御所勤め＞。　*「世」は＜姫を取り巻く情勢、またその動向＞のようだ。この文は訳文を読んで意味が分かったが、原文だけでは主語省略や曖昧な語用の所為か、さっぱり分からない難文だった。

*思ひそめきこえし心は違ふさまなめれど(当初考え申し上げた妃候補とは思惑が違う形ですが、今度の出仕についても)、*二条の大臣は(内大臣は)、心ゆきたまふなれば(了承なさっていらっしゃるので)、心やすくなむ(安心です)」　*「思ひそめきこえし心」は注に＜源氏は最初、玉鬘を尚侍として出仕させることを考えていた。しかし、鬚黒と結婚してしまったために、尚侍定員二名のうち、実務官としての尚侍になってしまったことをいう。＞とある。カミが定員二名とは組織管理上問題だが、女御や更衣ももともとは実務女官だったらしいので、有力者が帝に近づける高級公職女官に娘御を送り込んで勢力の拡大を図るという時の政治体制の産物とは言えるのかも知れない。実質は妃候補で名目上の尚侍と実際に事務を司る本来の尚侍との区別は、宮廷内では暗黙の了解人事だったということらしい。　*「にでうのおとど」は注に＜内大臣をさす。会話の中では、このように呼ぶ。二条に邸があった。＞とある。「二条」の明示は初めてだろうか。以前にもあった気がするが、もしかすると此処の明示を先取りした注記だったかも知れない。

など、こまかに聞こえたまふ(詳しい事情をお話なさいます)。

あはれにも恥づかしくも聞きたまふこと多かれど(姫は出仕の話を身に沁みて有難くも潔斎適わず違う形になったことを気恥ずかしくもお聞きになることが多く在ったが)、ただ涙にまつはれておはす(ただ涙をまつわらせていらっしゃいます)。いとかう思したるさまの心苦しければ(こうも悲しくお思い為さる姫の様子が気の毒なので)、思すさまにも乱れたまはず(殿は愛しいと思うままに抱き寄せることもお出来になれず)、ただ、*あるべきやう(出仕に際して気を付けるべき身だしなみや)、御心づかひを教へきこえたまふ(心構えなどを教え申しなさいます)。*かしこに渡りたまはむことを(右大将邸に姫が引越なさることを)、とみにも許しきこえたまふまじき御けしきなり(殿は直ぐには許し申しなさらない御意向でした)。　*「かしこ」は注に＜鬚黒大将邸にお移りになること。＞とある。